



連載 資産運用「茶飲み話」(15)

岡本 和久

寄付は超マネー投資！

東日本大震災以来、毎年、少しでもお役に立てればと寄付をさせていただいています。寄付先は日本フィランソロピー協会。高橋理事長には日頃からお付き合いいただいています。「どんな寄付先がいいでしょうか」と相談して、いくつかの候補を上げていただきます。その中からいくつかを選びそこへ寄付をしていただくのです。震災の年だったと思います。寄付先のひとつからすてきな絵や写真が送られてきました。震災後、経済的事情で働きに出る親が多いのですが、障害児の学童保育事業を行っていた団体が、施設の一部を改装して放課後の児童預かり事業を開始したのです。寄付金はそのエアコン購入資金に充当されました。



いま、思い出してもうれしかったです！「寄付も投資なんだ」とつくづく思いました。投資収益はお金で受け取るのが普通ですが、そのお金は幸福感に変換してこそはじめて意味があるのです。それなら、最初からお金を通さずに直接、幸福感をリターンとして受け取っても良いはずです。私はそれを「超マネー投資」と呼んでいます。しかも、その幸福感は「良いことをした」という喜びとしてずっと心に残ります。

銀行に預金して銀行がそのお金をどこに融資するのかを決めるのが「間接金融」です。株式や債券への投資はお金を出す人が自分で投資先を選びます。だから「直接金融」です。同じことが寄付にも言えます。大きな団体に寄付すると自分のお金がどのように使われるかわかりません。もちろん、どこに寄付をしてほしいという指示もできません。





長期投資仲間通信「インベストラ이프」

だから「間接寄付」なのです。その点で日本フィランソロピー協会の活動は本当に立派だと思います。まさに「直接寄付」への橋渡しをしてもらえる活動です。寄付の王道をこれからも広めてほしいと思いますし、同協会の尽力に敬意を表したいと思います。

リターンとリスク再考

証券市場におけるリターンとリスクの定義は一般に使われる意味と少し違います。リターンは収益率と言われますが、「収益」率というとなんか儲かる方のみを意味しているようです。投資ですから当然、損失がでる可能性もあります。ですから「損益率」とすることが正しいのだと思います。

問題はリスクです。普通、「RISK」という英語を辞書でひくと「危険」という意味がでています。しかし、投資の世界で危険は値下り、だからリスクは値下りと思っても当然です。投資でいうリスクというのは、期待した平均値からどれくらい離れる可能性があるのかを示します。どちらの方向に離れるかは関係ありません。つまり、上でも下でも平均値からのブレがリスクなのです。

しかし、ごく普通の生活者にその点の正しい理解を求めるのは酷というものです。生活感覚ではリターンは「儲け」、リスクは「損」です。あるいは、リターンは「上値メド」、リスクは「下値メド」と考えてしまう方が多いのは無理ありません。

しかし、儲けか、損かという発想はプラスか、マイナスかという二者択一の選択肢です。オンか、オフか、白か、黒かという話なのです。投資でいうリスクは真っ白から真っ黒まで一連のスペクトラムのようなもので、間にあるグレー部分を選択することが可能なのです。例えて言えば、ラジオやテレビの音声のダイヤルのようなものです。小さすぎて聞えないから少し音量を上げる。少しうるさいから下げるということが可能なのです。

典型的には株式はハイリスクです。預金はローリスクです。債券はちょうど真ん中ぐらいです。全部預金ならリスクはほとんどありません。全部株式なら非常にハイリスクです。しかし、その間に例えば、預金と債券と株式を三分の一ずつ持つとか、あるいはもう少しリスクをとるのなら預金を20%、債券を40%、株式を40%というような配分も可能です。つまり、二択とか、三択問題でひとつだけが正解というのではなく、それぞれをミックスすることが可能なのです。

ある意味、学校の試験も多くの場合、マル・バツ問題、四択問題が多いため、思考形態がそのように慣れてしまい、選択肢の中の唯一の正しい答を求めようとする傾向があるのかも知



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

れません。資産運用の話をして、多くの人が、「それで、どれが一番いいのですか」という質問をしてくるのにもそれは現れています。

そのような傾向が出てしまうのは、やはりリターンとリスクという言葉の影響もあるのだと思います。リターン、リスクという言葉を使うのを全面的に止めるのは困難だとしても、リターンを「平均損益率」、リスクを「予想変動幅」などとカッコ書きで説明する必要があるのではないかと思います。

「ためる」と「ふやす」の違い

よく退職後のために一生懸命お金を貯めている方がいます。でも、「貯めていれば安心」というのは相当、高収入の人で、実は普通の人には貯めるだけでは足りないのです。増やさなければいけない。どうも、「ためる」と「ふやす」の違いが十分に理解されていないように思います。

「ためる」というのは貯蓄です。貯蓄は収入から支出を引いた残りです。その残りをもっておくのが貯蓄です。とっておくだけですから、金利も配当金もありません。招き猫の貯金箱にチャリン、チャリンとお金を入れているだけです。

「ふやす」というのは投資です。これはお金を他の人に用立ててあげることです。その人はそのお金を活用して利益を生む。その一部を金利や配当金として支払ってくれるのです。しかし、他の人に用立ててあげるというのは自分の手を離れることですから、不安があります。最悪、一部または全部が戻ってこない恐れだってあります。これがリスクというものです。逆に言えばこのリスクをとるからこそお金は増えるのです。

投資で得た金利や配当金を再投資して複利で運用するなら、増え方が加速します。例をあげます。毎月3万円、つまり、年間で36万円を「ためる」(＝貯蓄する)と30年間では1080万円になります。もし、毎年36万円を年2%という収益率で、配当金を再投資する複利で投資したとすると30年後には1460万円となっているのです。

もちろん、年2%という低い利率でもリスクはあります。例えば500万円のお金を一人の人に用立てて、不幸にもその人が事業に失敗すると致命的ダメージを受けてしまいます。しかし、50万円ずつ10の人に用立てれば、10人のうちの一人がうまくいかなくても全体に対する影響は限定的です。これが分散投資の考え方です。ですから、人生を通じた資産運用では、いかに資産額の変動を分散投資でコントロールしつつ目標とする収益率を獲得していくかが課題となるのです。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

なぜグローバル投資か

新聞の株価欄を見ると最初に「水産・農林」、続いて「鉱業」、「建設」、「食品」、「繊維」と並んでいます。そして真ん中あたりに「機械」、「電気機器」、「輸送用機器」、「精密機器」、……、「商業」、「金融」、「不動産」、……、「情報・通信」、「電力・ガス」で終わっています。なぜ、このような並び方になっているかご存じですか？

私が昔、聞いた話では、戦後、取引所が1949年に再開されるとき、当時、日本にとって重要な産業の順番に並べたということです。真偽のほどは100%確かではありませんが、何となく納得できる話です。それにしても、戦後70年経ち、産業構造も随分、変化しました。その中で業態を時代に合わせて変化してきた企業もあれば、時代に乗り遅れ落ちこぼれて行った産業・企業もあります。

90年代の中ごろから経済のグローバル化が急速に進みました。その結果、それぞれの国が自らの競争力を活かせる分野がその国の成長をけん引するようになってきています。従来、日本で生産されていた数多くの商品が海外で生産され、日本に輸入されるようになってきました。戦後、日本の中で起こった産業構造の変化はグローバルに起こっているのです。

そのように考えると日本株だけを投資対象とするのはまるで、株価欄の一つの産業だけを買っているようなものです。しかも、日本は経済が成熟し、人口も減少をしています。その点を考えると株価欄の前の方の産業ばかりを買っていることになりそうです。

もちろん、例えば繊維や食品産業のように株価欄の前の方の産業でも、環境変化にうまく対応して、今日、大成功している日本企業があることは事実です。同じように日本企業がグローバルに大成功するケースもたくさんあるだろうと思います。しかし、それでも、やはり一つの国にしか投資をしないというのは、日本のマーケットの中で一つの業種しか投資しないと同じようなものです。

事実、我々の生活自体がグローバルな産業や企業によって支えられています。我々が将来の生活防衛のために資産運用をしようというのであれば、我々の日々の生活を支えてくれる企業を保有しなければなりません。いまや、グローバルな投資は不可避であると言ってよいと思います。

お金はきれいか、汚いか



長期投資仲間通信「インベストラيف」

目の前の1万円札、あるいは1000円札、これはきれいでしょうか、汚いでしょうか。どちらでもないのです。きれいでも汚くもない。ただ、単なるお金です。でも、お金にはきれいな稼ぎ方と汚い稼ぎ方があります。それから、お金にはきれいな使い方と汚い使い方があります。

お金の本質は「感謝のしるし」です。自分が、額に汗して働き稼いだお金を手放して、商品やサービスを手に入れるのです。当然、買い手は「良い商品やサービスを提供してくれてありがとう」と思うからこそ、苦勞して稼いだお金を手放すのです。

感謝されて受け取るお金はきれいなお金です。そして、自分の仕事が他の人に喜んでもらえたという喜びを運んで来てくれます。このようにして稼いだお金が貯まっていくということは、人から受けた感謝が貯まっていくことでもあります。ですから、本来、お金持ちは人からたくさん感謝された人だとも言えます。

では、どうして、お金に対するイメージが悪いのでしょうか。それは世の中には時々、人に感謝されることなく、人から奪ったり、人を犠牲にしたりしてお金だけを得ようという人がいるからです。そして、それはすぐにばれるのです。そして、テレビや新聞でのお詫び会見になったり、逮捕されるシーンになったりするのです。忘れてはいけないことは世の中の大部分の人はまじめに仕事をして、世の中のためになることをしてお金を稼いでいるのです。

それでは良いお金の使い方とはどんなものでしょうか。「あなたはお金持ちになりたいですか？しあわせ持ちになりたいですか？」と聞くとほとんどの人は「しあわせ持ち」というでしょう。人生の目的はしあわせ持ちになることです。

では、どうしたらしあわせ持ちになれるか。自分の心をよく観察してください。おそらく他の人を喜ばすことが、実は自分にとっても喜びであることがわかるはずです。他の人とは、いま、まわりにいる人たちだけではなく、我々がこの世を去った後も含めてずっと将来の他の人たちも含みます。つまり、より幅広く、より長期にわたってみんなが喜ぶような使い方が自分を一番幸せにしてくれるのです。

何かの商品やサービスに対してお金を払うのもひとつの方法でしょう。その時、できるだけ良い世の中創りに貢献してくれる企業の商品やサービスを買うというのは大切なことです。また、寄付をするというのも、一つの良いお金の使い方でしょう。

そして、投資もその手段です。いますぐ必要としないお金をいますぐ必要とする企業に用立ててあげる。その企業のオーナーになってお金を融通してあげる。その企業はお金を活用し



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

て良い世の中創りに貢献する。そして、世間から感謝されビジネスは成長する。その利益の一部が「お金を使わせてくれてありがとう」という感謝と共に利息や配当金・株主価値として返ってくるのです。

もちろん、いまの自分のためにお金を使うことは必要です。しかし、それだけではなく、できる範囲で、現在から将来にわたる、より多くの人々のためにお金を使うと自分にとっての幸福感が増してくる。そんなお金の稼ぎ方と使い方がしたいものです。